



看護学部・助教授
中澤 浩
<http://phi.ypu.jp/>

4月から公衆衛生学と看護健康情報学担当の助教授として着任しました。これまで東京大学の人類生態学教室に所属し、パプアニューギニアやソロモン諸島に住み込んで、食生活や人口や感染症などの調査をしたり、実験室で環境試料や生体試料の分析をしたり、それらの結果を使ってコンピュータシミュレーションをしたりという研究生活を送ってきました。こちらでは、前期の講義は全学基礎教養の統計学だけなので、溜まっているデータをバリバリ論文にするぞと意気込んでいたのですが、意外にたくさんの方を委員を兼務することになってしまい、多忙な毎日を送っています。もっとも、これまでの4倍以上の広さの研究室から外を見ると緑が広がっていて、環境は格段に良くなったので、これから頑張ろうと思っています。

さて、この原稿は「学内情報」に掲載する新任教員の挨拶文ということで、多くの方の目に触れると思いますので、この場をお借りして、来年度の看護健康情報学(看護情報処理論)という科目を教えるために考えたことをご紹介します。情報処理教育をするにはコンピュータとソフトウェアが必須です。現在一般に情報処理教育といえば、WindowsやパソコンとマイクロソフトのオフィスソフトやSPSSなどのパッケージソフトが使われていることが多いと思います。それは、企業などで実用されているソフトウェアの操作に慣れておくという意味では正しい戦略です。しかし、コンピュータはまだしも、ソフトウェアを継続的に更新しながら利用するにはかなりの費用がかかるのが現状です。したがって、卒業した後に自分でソフトウェアに投資するというのは大きな負担になり、現実的ではありません。とくに、マイクロソフト・オフィスのライセンスが定期的な更新を要するようになったことの影響は大きいと思います。教育的見地からも、先ごろ大綱の素案が発表された「知的財産戦略」の線でも、一企業のテクノロジーだけに依存したソフトウェア環境は危険です。

ソフトウェアのあり方としては、企業が作成して販売しサポートもするというパッケージソフトの対極に、使う人が共同で開発し無料で配布するけれども、無保証だし、サービスを受けるだけの関わり方は歓迎されない、オープンソースのコミュニティがあります。無料であることやユーザ本位の開発(開発者自身がユーザなので当然ですが)に加えて、オープンソースのソフトウェアの最大の利点は、動作に不審な点があれば、いつでも自分でソースコードを見れば(若干の勉強は必要ですが)、そのソフトウェアでは何がどういう仕組みで行われているかを調べることができる点にあります。エクセルやワードで動作不良があっても自身がブラックボックスなのでどうしようもありませんが、オープンソースなソフトならどこがおかしかったのかを自分で調べることができます。その意味でも、情報処理教育には適していると思います。

こうしたオープンソースのソフトウェアの典型的なものが、ハードウェアを制御する基本ソフトであるオペレーティングシステム自体をオープンソースにして開発している、LinuxやFreeBSDです。また、開発環境は共有財産的な意味が強いので、gccはずっと以前からオープンソースでしたし、組版などでもTeXはオープンソースですし、統計解析でもRという素晴らしいオープンソースなプロジェクトが軌道に乗っています。

これら専門家が使うツールに比べて、主にビジネスユーザが使うオフィスソフトは、思想的に馴染まなかったためか、これまでオープンソースで満足の行くものはありませんでした。しかし、最近になって公開された、OpenOffice.orgというソフトは、十分に実用的です。ワードやエクセルとパワーポイントと操作感が似ているだけでなく、それらのファイルを読み書きすることができます。これからは、情報処理教育全般をオープンソースなソフトだけでやっていける可能性がでてきました。コミュニティのアクティビティをどのように高め、維持するかがオープンソースなソフトウェアを成功させるための鍵なので、関心をもたれた方は、是非積極的に参加されるよう、お願い申し上げます。

※この原稿で紹介した各ソフトウェアのサイトへは、<http://phi.ypu.jp/swtips/>からリンクを張ってあります。また、この原稿は、Windows版OpenOffice.orgのDrawで作成したものです。